イタリア語における clitic の機能と構造

―同音性によるオーヴァーラップ現象を中心に―

Ordine dei clitici in italiano

藤　村　昌　昭

Masaaki FUJIMURA

はじめに

言葉を連続させて相手に何かを伝達しようとするとき、その配列（語順）は何を基準として決定されるのか。その言葉が有する機能が優先されているのか、それとも、日本語で言うところの≪語呂の良さ≫つまり音律的調和に重点が置かれているのか、また、この「語呂が良い」とか逆に「悪い」という判断は、一体何を根拠にした結果の表現なのか。単に聞き慣れているという≪安堵≫（記憶との調和）からくるものなのか、それとも、その音自体に何か心地よく感じさせる≪刺激≫（本性との調和）が潜在しているからなのか。いずれの場合も、人間の本性は常に合理的な≪機能性≫と音律的な≪音楽性≫の調和を追求するものであり、言語の科学的な研究が直面する様々な諸現象は、二者択一を迫られながら一種の≪均衡状態≫を模索する≪本性のジレンマ≫の具現に他ならない。[1)]

さて、イタリア語における clitic [2)] の配列に関する研究は、

1）ロマンス語系に生じた配列交替の一環として論じられたもの[3)]

2）機能主義的な分析から一般的（時には普遍的）規範を追究したもの[4)]

3）生成文法的規範に基づいて配列体系の構築を目指したもの[5)]

4）イタリア語独自の特殊性を標準語化に焦点を当てて帰納的方法によって体系化したもの[6)]

に大別されるが、配列の問題には直接的ではなくても、語源的・方言的資料に基づく地道な研究成果の間接的な関与[7)]と、さらに、性急な配列の一般化（普遍化）に疑問を投じた個々の要素の詳細な再検討による問題提起[8)]がなされていることも忘れてはならない。

1. オーヴァーラップという概念

本稿の中心的概念でもあるオーヴァーラップという言葉は、単なる音声上の同化現象を意味するものではなく、同一の語源から派生したものであっても、実際には同音異義語という定義付けによって機能的にも個別化された複数の要素が、他の要素と同一空間において遭遇する（配列される必要が生じた）場合、その同音性を有する要素は、明確な機能分化を実現した後も、なおその同族的核によって統制されていることを意味する。このオーヴァーラップの概念は、本稿で問題にされるcliticの配列 だけに限定されたものではなく、現代的な機能化の必然性に迫られながらも音律的な調和を追求するイタリア語の本性（特殊性）の科学的な研究において、対象の量的分析に基づく一般化（規則化）の過程で特に無視されがちな少数因子（多くの場合「不規則」や「例外」のラベルによって処理される）の潜在的特質の解明にも適用可能なものである。[9)]

1.1 実　行

イタリア語の clitic は、音声的には１１種類、mi, ti, ci, vi, si, gli, le, lo, la, li, ne（順不同）に集約され、各々がその同音性のなかで異なった複数の機能を共有する状態にある。次表はオーヴァーラップの概念を実行して、同音性を有する要素を個々の機能と相関的に体系化したものである。

対象と機能	mi	ti	ci	vi	si	gli	le	lo	la	li	ne
名　詞（対格）	+	+	+	+			+	+	+	+	
〃　（与格）	+	+	+	+		+	+				
再　帰（対格）	+	+	+	+	+						
〃　（与格）	+	+	+	+	+						
副　詞（場所）			+	+							+
前置詞句			+	+							+
情報内容								+			
主格補語								+			
慣用的冗語			+	+					+		+
非人称性			+	+	+			+			+
受動性					+						

2. 機能的対立

同音性によるオーヴァーラップという概念に基づいて１１種類に集約された各要素から、機能的に内在する異質の要素を抽出してみることにしよう。この機能的対立は、体系的に大別すれば、人称代名詞非人称代名詞という対立によって理解され、具体的には、前掲の図表における代名詞（名詞と再帰）のプラス因子と非人称性のプラス因子の対立に還元される。つまり、同音性のなかに異質の機能（後にその語源的同質性が解明される）を共有する要素は、代名詞内部における le のミクロ的対立（３人称与格 vs 3 人称複数対格）を加味して考えれば、

ci　vi　si　le　lo　ne

であると言える。

そこで、これらの機能的対立を、別の視点から、具体的には疑問詞の機能と対比させて視覚的に分析してみたい。

対象と機能	疑問詞	mi	ti	ci	vi	si	gli	le	lo	la	li	ne
代名詞(対格)	chi	+	+	+	+	+		+	+	+	+	
	che cosa					+		+	+	+	+	
代名詞(与格)	a chi	+	+	+	+	+	+	+				
	a che cosa					(+)	(+)	(+)				
副詞(場所)	dove			+	+							
	da (di) dove			+								+
前置詞句	a che cosa			+	+							
	di che cosa											+
情報内容	che cosa								+			
主格補語(非人称性)	come								+			
慣用的冗語(人称性)	che cosa									+		
慣用的冗語(非人称性)	in quale situazione			+	+							
	da dove + di che cosa											+
非人称性	chi (chiunque)					+						
受動性	che cosa (passivante)					+						

＊図中の(+)は、理論的には機能するが、それは擬人法を用いた表現に限られる特殊な状況下における機能と判断したためである。[10)]

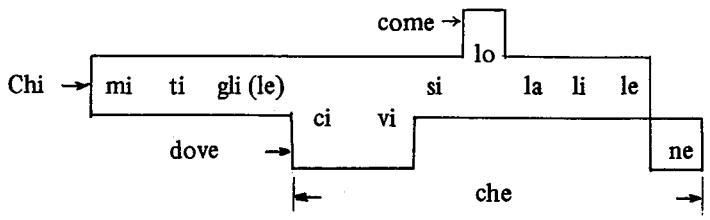
さて、疑問詞の機能に焦点を当てて対比させてみると、イタリア語のclitic は、chi(人、擬人)、che(物、物事)、dove(場所、状況)という3つの対象を代用する小詞に集約され、come(様態)と対比させられた、いわゆる不完全自動詞の補語を代用するloだけが、独立した要素として理解される。

2.1 機能集合

機能的に対立する要素を疑問詞と対比させることによって確認された結果を、集合論の法則を適用して整理してみると、

1) chi = { mi, ti, ci, vi, si, gli (le), le, lo la, li }
2) che = { ci, vi, si, gli (le), le, lo, la, li, ne }
3) dove = { ci, vi, ne }
4) come = { lo }
5) chi' = {lo, ne} (chi' は chi の補集合、つまりchiの機能を有さない要素)[11)]
6) dove ⊆ che (doveの機能を有する要素はcheの集合に含まれる)
7) che ∩ dove = { ci, vi, ne } (cheとdoveの機能を共有する要素)
8) chi ∩ (che∩dove) = { ci, vi } (chi, che, doveのすべての機能を共有する要素)
9) chi−che = { mi, ti, gli (le) } (chiの機能だけを有する要素)
10) (chi ∩ che) − dove = { si, le, lo, la, li } (chiとcheの機能は共有するが dove の機能を有さないもの)

これまで暫定的に配列（順不同）されていた要素を、疑問詞の機能レベルと集合の概念によって一部修正を加え、立体的に図式化しておくことにする。



3. 機能分化とその要因

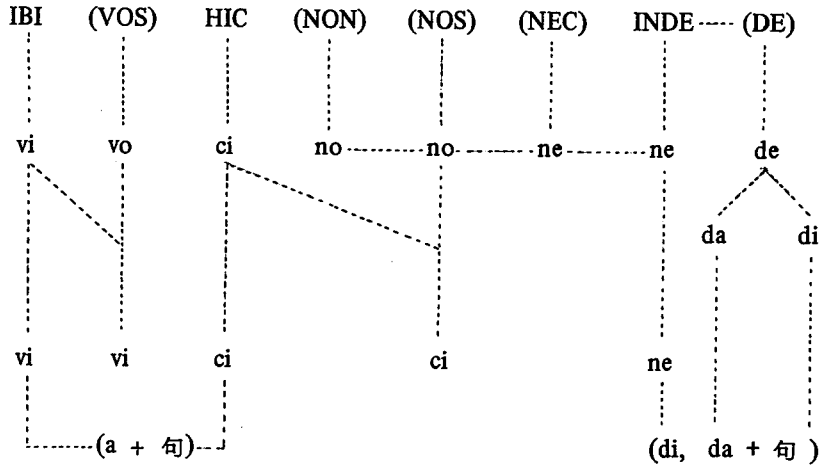
最終的な配列を試みる前に、またオーヴァーラップの概念を≪同族的核機能による統制≫として定義付けるためにも、同音性のなかに異質の機能を共有する要素の語源的同族性と、その機能分化の要因を確認しておかなければならない。概略的な派生の解説は他の研究に譲る[12]ことにして、ここでは≪機能的対立≫として抽出された要素 (ci, vi, si, le, lo, ne) だけを取り上げてみたい。

《 ci, vi, ne 》

これらはdoveの機能集合として確認された要素であり、語源的にもラテン語の場所の副詞に由来（ci <* HICCE < HIC + ECCE, vi < IBI, ne < INDE）すると考えられているが、通時的・地理（方言）的空間における≪変異体≫までを考慮すれば、各々の音韻過程と形態過程が複雑に交錯（あるいは混交・融合）していることがわかる。[13]音韻論の立場からは、ラテン語の軟口蓋子音［k］の硬口蓋化［tʃ］、両唇音［b］の両唇軟口蓋化［w］（あるいは硬口蓋化［v］）、子音群の同化（-nn- < -nd-）というイタリア語に共通した音韻過程の現象として比較的容易に合意を見るが、意味論の立場から現代の機能分化の要因を究明する場合には、なお不明隙な部分を多く残している。なかでも、現代のneが、古くは（方言的なレベルでは現在も）ci の同義語（１人称複数代名詞）として併用されていた（いる）事実が、現代の機能分化が定着するまでの通時的変異の意味論的な体系化を困難なものにしている。

さて、現代語のレベルにおけるcliticの配列決定が主眼である以上、通時的空間にあまり長い時間留ることは避けて、≪場所の副詞≫→≪人称代名詞≫という一種の類推による意味の拡大（あるいは転化）を、≪場所の擬人化≫として把握してみたい。この現象は、すでにラテン語における場所の副詞と指示代名詞の同義性にも、その要因の根源を認めることができるし、身近なところでは、**こそあど**による≪場所と人称との混交≫（此処 此方、此方人等、其処vs其方）が、解明の糸口を提供してくれているように思われる。

いずれにしても、語源的には場所の副詞を核とした発展と考えるのが自然であり、ci, vi, neが共有する他の機能（前置詞句、慣用的冗語）の場合は、前置詞という機能が定着する過程での拡大使用として容易に理解される。そこで、この場所の副詞を核とした発展過程を、類推的な要因を導入しながら視覚的に（あくまでも暗示的な冒険心から）辿っておくことにした。



《 si 》

オーヴァーラップの概念の適用を達成するためには、最も面倒な要素である。つまり、ラテン語の再帰代名詞 SE を共通の語源としながらも、現代語法においては、再帰、非人称、受動（受動的の方がより正確かもしれない）という異質の機能分化を実現しているからである。この場合 ci, vi, ne と同様に拡大使用として処理してしまえないのは、語源的な意味論の領域を越えた統辞論に係る問題であり、 clitic の配列に大きく作用する要因として捉えなければならないからである。このことは、再帰と非人称の機能が同一空間において統辞論的に共存（ci si の音配列によって）が認められている事実からも否定の余地はない。[14)]

さて、具体的な si の用法に関する解説は、本国の研究に譲ることにして、現代語法における機能分化を実現させた要因について検討を加えてみたい。結論から先に言えば、それはラテン語の統一的な語尾の機能の一方での消失と他方での保存にある。具体的には、

1） 名詞の語尾屈折（格機能）の消失

2） 動詞の語尾屈折（人称機能）の保存

として表現される。言語構造全体を統制している要石の一部に亀裂が生じた場合、それは時間の経過とともに構造全体を揺るがす要因にもなりかねない。ただ現実的には、その揺れの程度に応じて、部分的（時には全体的）に補強される。イタリア語の場合、 1） に対する補強は、他のロマンス系の言語と同様に、冠詞や前置詞といった新しい要素の導入と、主に動詞を中心にした左右の位置の機能化によって試みられたが、その一方で、 2） は依然として主語の省略と、同時に主語に対して（条件付きで目的語にも[15)]）動詞の左右の位置を容認している。つまり、この反対方向のベクトルの接点（盲点・死角）に、問題の si が存在していると思われるのである。抽象論はこれまでにして、具体的なラテン語の再帰的語法の例文を引用することによってこの接点を指摘してみたい。

Cenam sibi parat.

La cena si prepara. . . . . ①

Si prepara la cena. . . . . ②

ラテン語の原文は、3人称単数を主語とし、cēnamを目的語とする強調的な再帰形式（他動詞と冗語的再帰代名詞与格）の表現である。[16] それに対して、①はラテン語の語順を変えずにイタリア語に直されたものであり、対格としての語尾機能を消失したcenaは、動詞の左、つまり主語の位置を確保したかに見える。一方、②はcenaの対格としての機能を動詞の右の位置によって補なっているといえる。ところが、機能を重視して理論的な配列転換を完成したはずの②の文頭に位置するsiは、その生来の冗語性と格機能（与格）の消失によって、原文の主語（主体性）を不明隙なものにしてしまっているのである。ただし、それでも「夕食が仕度される」という状況だけは伝えている。つまり、この≪焦点ボケ≫ともいえる状態のなかから、現代語法の機能分化（再帰・非人称・受動）が開始されたと考えたい。[17]

《 lo 》

ラテン語の指示詞からの直線的な派生 (lo < ILLUM) であり、3人称・単数・男性・対格というラテン語と同質の核機能を有することは容易に認められるが、現代の機能分化（不完全自動詞の補語、情報内容）が定着するまでには、かなりの時間を要している。

まず、補語を代用する機能の源流としては、フランス語の非人称的中性詞ilや、北イタリアのミラノを中心に根強く分布する中性詞el（母音の前ではl'）の存在が示唆しているように思われる。

Il fait chaud.	（フランス語）	Fa caldo.	（イタリア語）
Il est quatre heures.	（ 〃 ）	Sono le quattro.	（ 〃 ）
El fa bell temp.	（ミラノ方言）	Fa bel tempo.	（ 〃 ）
*L'*è minga vera.	（ 〃 ）	Non è vero	（ 〃 ）

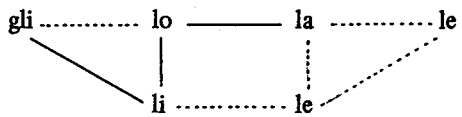
つまり、第一段階において仮主語的に機能する中性詞に、前出の補語の反復が拒否（主に文体的な配慮からと思われる）された段階において、補語の代用という機能が付加されたと考えられる。現に、口語のレベルで登場することは少なく、他の要素との音声結合も認められていない独立した要素であることからも、核機能から分離された文体的な≪変異体≫として定義付けられる。

次に、情報内容（具体的には、他動詞の直接補語として機能する不定法や節）を代用する機能の場合、標準語のレベルでは、先に引用したフランス語やミラノ方言（音声的な違いはあっても共にleと表記）と同様に、3人称・単数・男性・対格としての語源的な核機能を有している。ところが、トスカーナ地方ではloの代りに、laが補語を代用する機能として拡大的に使用されていることや、このlaが、標準語のレベルにおいても、慣用的冗語としてその残痕が確認されることから、空間を異にして統一的に拡大使用されていた中性詞(lo, la)が、標準語の空間において中和（lo≒言及された具体的な情報内容、la≒言及されていない暗示的な情報内容）されたと考えるべきであろう。

《 le 》

他のla, li, gliおよび前出のloと同様に、ラテン語の指示詞からの派生であることは容易に認められても、機能面からの発展過程においては不明瞭な部分も多い。つまり、3人称・単数・対格として機能す

るlo, laについては、ラテン語からの直線的な発展過程(lo＜ILLUM, la＜ILLAM)のなかで把握されるが、3人称・複数・女性・対格としてのle(同男性はli)、および同単数・女性・与格としてのle(同男性はgli)については、音韻的にも形態的にもラテン語からの直結は不可能であり、語源的に同質の発展過程を辿った定冠詞の性数から、音韻的・形態的に類推されたものとして理解されなければならない。



ラテン語の与格から派生したli(＜ILLI, ILLIS)は、視覚的および音声的に機能分化を達成したが、leは今もなお、その同音性のなかに不合理な異質の機能を共有している。ただ、このleの使用は比較的新しいものであり、古くは男性代名詞のli, gliが併用されていたことや、地方的には男性形に吸収されている事実、[18]さらに標準語のレベルにおいても、他の要素(lo, la, li, le, ne)と音声結合する場合には、gliと同音の変異体(glie-)によって自らの機能分離を実現していることから、3人称・単数・女性・与格としてのleは、男性形gliの核機能に依存しているともいえる。そして、この不合理なleの放置は、現代語における2人称の敬称代名詞の交代(2人称複数→3人称単数)、つまり女性代名詞Leiの勢力がVoiに代って台頭してきた事実と密接な関係にあると判断されることから、配列決定の重要な要因として再び取り上げてみたい。

4. 帰納法による配列

オーヴァーラップの概念を強引に実行した後、語源的な核機能に基づいてその限界らしき空間を確認した時点で、現代語法にみられる配列の諸例に帰納法を適用して、結果論的な立場からclitic全体の配列体系を設置してみることにしよう。その際、loに確認された単独機能(主格補語の代用)は除外して考えることにする。またこれ以後、左右の位置関係を利用して表記される配列は、動詞に前置される≪後接語(proclitic)≫としての機能配列を意味し、≪前接語(enclitic)≫として機能する場合にも、その配列を変えることなく接合されることを明記しておかなければならない。

4.1 決　　定

I		II	
mi-gli (le_1)-vi-ti-ci-si_1	-	ne-lo (la, li, le_2)	si_2

*le_1 ＝ 3人称・単数・女性・与格

le_2 ＝ 3人称・複数・女性・対格

si_1 ＝ 3人称・再帰

si_2 ＝ 非人称・受動

1) I群内の配列は、mi＞gli (le), gli (le)＞ci (vi), vi＞ti, ti＞ci, ci＞si の接合例より

2) II群内の配列は、ne＞lo, lo＞si の接合例より

3) I群＞II群の配列は、si_1＞ne(実行はse＞ne), si_1＞lo(同se＞lo)の接合例より

4） I群とII群の接合は、I群の母音変異 -i ＞-e (gli と le の場合は glie-) によって実現されるが、$si_1 + si_2$ の場合だけは、母音変異を起こさずに ci ＞ si によって実現され、I群内の ci ＞ si と同音異義語を形成する。[19]

5） II群内の $ne + si_2$ は、se ＞ ne によって実現され、I群内の $si_1 + ne$ と同音異義語を形成する。

なお、以上の規範は、諸研究に引用された3要素の接合例（現実的な頻度は別として）をも充足していることを付記しておく。[20]

4.2 配列決定要因

帰納法による結果論的な配列は一応設定されたが、その配列決定に働いた要因を解明して、本稿の目的である≪核機能による統制≫というオーヴァーラップの概念を完成に導かなければならない。そこで、前掲の帰納法による配列図を、これまで検討を加えてきた機能集合、機能分化とその要因に照らし合わせて注視した結果をまとめてみると、

1） chi の機能だけを有する要素 mi, ti, gli (le) は、vi が介在してはいるが、I群の左り寄りに位置する。

2） chi, che, dove のすべての機能を共有する要素 ci, vi にも配列が実行され、特に注目すべきことは、両者の間にchiだけの機能を有する ti が介在していることである。

3） $si_1 + si_2$ は、ci ＞si によって実現される際に母音変異を起こさないが、逆に、$ne + si_2$ は $si_1 + ne$ と同様の母音変異を起こした上に、se ＞ ne という逆行的な配列によって実現される。

さて、1）と2）を同時に解決するためには、vi が同質の機能を共有する ci から離れて、しかも chi だけの機能集合のなかに位置づけられた理由を究明しなければならない。そこで、≪le≫のところで触れた≪2人称の敬称度≫の問題を再び取り上げてみたい。標準語のレベルでは Lei の勢力が支配しているが、地方的には Voi もなお根強く分布している。[21] 通時的な考察からは、Voi の起源は遠くローマ帝制期（3世紀）にまで遡ることも可能であるが、[22] 実際に tu（親称）との明確な区別が確認されるのは13世紀末のことである。[23] 他方、vi ＞ ti ＞ci の配列、つまりviが前方移動を開始したのは、14世紀初頭。[24] この定着と開始は単なる偶然の一致と言えるだろうか。さらに、現代の第一勢力である Lei は、15世紀から出現したとされるが、[25] 代名詞化(la, le)が平行して進められていない事実からも、vi の君臨は否めない。ここにおいて、vi の配列決定には、語源的な場所の副詞としての機能ではなく、2人称・単数・敬称としての人称機能が核として作用しているという仮説を提唱したい。

次いで、gli (le) の第2位の位置決定に働いた要因も、≪2人称の敬称度≫のレベルで考えてみたい。つまり、通時的な考察から「3人称複数の対格と区別されない状態（li あるいは i）が続き、15世紀頃から音韻的にも形態的にも独立した gli が、時を同じくして登場した Lei の分身として活躍し、vi との闘争を繰り返すなかで、Lei 本体の与格機能 le の援護を受けることによって、標準語のレベルでは vi より優位に立っている」という歴史物語として。

最後に3）の事実からは、si_2（非人称・受動）は、3人称対格 (lo, la, li, le) が存在しない空間において、I群の si（再帰）の位置に移行して他の要素と接合する。つまり、同音性によるオーヴァーラップが実行されて、再帰の核機能による統制下に入る、という仮説が成り立つ。

4.3 核機能とその強度

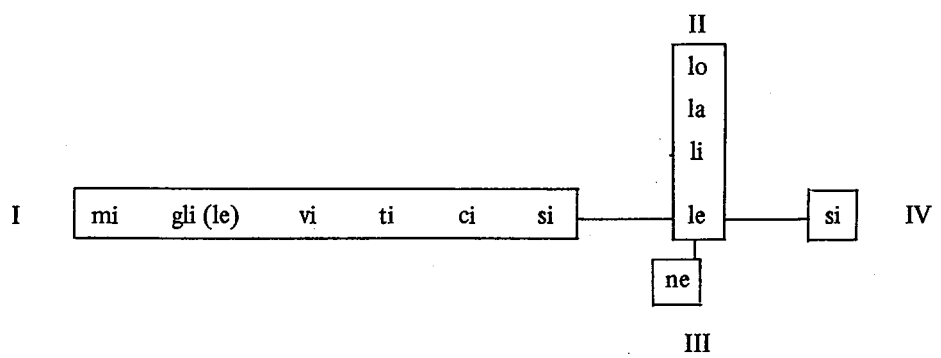
帰納法による配列から出発して、その決定要因を仮説するに至ったが、これまでを整理する意味から、各々の要素の核機能を再確認して、配列体系に作用する核機能の強度（あくまでも標準語のレベルにおいて）を設定してみたい。

① mi ：1人称・単数
② gli (le)：2人称・単数・敬称（＞vi）
③ vi ：2人称・単数・敬称
④ ti ：2人称・単数・親称
⑤ ci ：1人称・複数
⑥ si ：3人称・再帰
⑦ ne ：場所の副詞（≧lo）
⑧ lo (la, li, le)：3人称・対格

なお、neの場所の副詞としての機能（da句）は、文語のレベルでは認められても（その場合の強度はne＞lo)、口語のレベルでは独立した核を形成していると考えられ、その場合、もう一方の機能（di句）は、その統制下から離れて3人称対格と同程度の強度を示す。ただ、このneがII群の先頭の位置を確保しようと望むのは、I群の同質的機能（場所の副詞）に引き寄せられてのことと思われる。[26)]

また、核機能と強度の問題に関連して確認しておかなければならないのは、同群内における同質機能同士の接合（人＋人、物＋物、場所＋場所）が、理論的に可能な場合であっても、特に口語のレベルでは、その≪重さ≫のために避けられる傾向が強いということである。[27)] 理論は常に机上のものとして終る運命にあり、文語的なレベルでの実行を試みることは許されても、口語的なレベルでは、音声的な反復による≪記憶の強度≫（これが「語呂」の良さを決める基準なのかも知れない）が、理論に優る判定を下すのである。つまり、この≪叫びの強度≫が核機能の強度に作用し、配列決定を左右しているとも考えられるのである。

5. 結論にかえて



＊(1) Iの要素は他の要素との接合において母音変異（-i ＞-e）を起こす。
(2) IIが消失した段階でIVはIの同音にオーヴァーラップする。
(3) IIIは原則的にIIと同列に位置するが、文語のレベルにおいてのみIIとの接合が認められる。

《 配列決定要因 》

1） 同音性によるオーヴァーラップ

2） 機能集合

3） 人称度（ 1 > 2 > 3 > ø、単数>複数 ）

4） 2 人称の敬称度 (Lei > Voi > tu)

5） 記憶の強度

注

1） 藤村（1984）:「五線符に表現されたイタリア語のアクセント構造」、大阪外国語大学学報第66号 pp. 81-106

2） 「代名詞」では機能的に不合理なので、英語で表記したが、「代用小詞」と訳したい。

3） Santangelo & Venneman (1976) で、イタリア語における対格と与格の配列交替の問題が、S V O の概念に基づいて論じられ、文献的にも詳しいものであるが、本稿では別の要因を仮説してみたい。

4） Seuren (1976) に代表されるが、機能重視の余り、逆に体系化が複雑になりすぎている。

5） Lo Cascio (1970) に詳しいが、機能重視の傾向は否めず、特に si（非人称・受動）などは体系外で処理されている (pp. 113-125).

なお関連の論文は、Lo Cascio 自身の編集による次の雑誌に掲載されている。

"On clitic pronominalization" (Italian Linguistics 2), The Peter De Ridder Press 1976

6） Hall (1971), Lepschy (1977, 1981) の研究に見られるが、前者が実例を帰納法によって整理しているのに対して、後者には標準語化（簡素化）のための理論的示唆が多い。

7） Meyer-Lübke, W. (1941): *Grammatica storica della lingua italiana e die dialetti toscani,* Chiantore

Migliorini, B. (1962): *Storia della lingua italiana,* Sansoni

Rohlfs (1968)

Tekavčić (1972)

8） Simone, R. (1983): *Punti di attacco dei clitici in italiano*, Studi linguistici e semiologici 18, Il Mulino

9） 例えば、名詞の複数語尾に見られる不規則性 (-chi : -ci, -ghi : -gi) において、アクセントの位置による規則化をも拒否する要素 (cataloghi, carichi, dialoghi 等) は、動詞の核機能によって音声的な統制を受けている (-care, -gare 動詞の 2 人称単数活用) と考えるべきであり、その証拠に、頻度の減少から動詞の核機能を失った filologare の場合、昔はその統制下で filologhi として存在した名詞が、今では filologi として独立している。

10）これまでに現代語のレベルでは次の2例を確認したにすぎない。

Ho la macchina qui fuori. Può darle un'occhiata ?

（この場合、le = alla macchinaと与格で用いられているが、自動車修理工場という特殊な状況下における車の擬人化といえる。）

Un pino maestoso . . . l'inverno infatti non **gli** porta via il suo mantello verde. (gli = al pinoであるが、明らかに松を擬人化した表現である）

11）実際には、neは前置詞句の機能において人にも用いられるが、3人称に限定された機能なので除外して考えた。ただ、結論の部分では3人称対格と同列的な存在として確認される。

12）Tekavčić (1972), pp. 230-258

13）ミラノ方言を例にあげると、*ghe*と表記される小詞が3人称与格（標準語ではgli, le)と場所の副詞（同じくci)の代用に共通して用いられ、1人称複数代名詞（同じくci)は*ne*によって代用される。さらに、標準語からの類推 (*ne* = ci = *ghe*) による一種の拡大使用、つまり、1人称複数代名詞を*ghe*で代用してしまう場合もある。なお、語源的にはラテン語の場所の副詞 (HIC) からの派生と考えられることから、その複雑さは容易に理解される。

cf. Tekavčić (1972), pp. 247-248

14）このci si（理論的にはsi si）が定着した要因として、トスカーナ、特にフィレンツェを中心とした地方的文法体系を無視することはできない。そこでは、1人称複数（直接法現在）の活用が、3人称単数の活用にnoi siを先行させて用いられる。この用法が再帰的表現に適用されるとき、必然的にnoi ci siの配列が実現されるのであり、標準語の非人称的再帰表現のciに、この1人称複数の再帰代名詞の機能が潜在していることは否めない。なお、この地方的文法体系においては、標準語における統一的な活用語尾 (-iamo)は、命令表現（英語のlet's) を実現させる要素として機能する。また、再帰代名詞の使用に関して確認される地方的な要素として、ミラノ方言に現存する統一的使用（すべての人称に対してseで代用）や、トスカーナ地方に分布する1人称複数への使用(noi si alziamo)を付記しておくことにする。

以上の例から、標準語における非人称のsiは、「任意の状況下において、ある行為に係りを持つと考えられる人間を、量的に限定しないで示唆している」と定義づければ、かなりの拡大使用までを正当化できるように思われる。そして、多くの文法家が、トスカーナの冗語的なsiの不合理な使用を指摘するとき、「salire（登る）とsalare（塩をかける）の1人称複数の活用は、トスカーナではnoi si saleとnoi si salaで区別しておりますが、あなたがたはsaliamoだけでお困りでしょう」と皮肉たっぷりに反論する。ただし、これは言葉の遊びであって、実際のところは、-iamoの命令機能が強くなりすぎたことによる平叙機能としての語法であり、標準語のci siは、その拡大使用を逆に限定したと考えるべきである。

15）Questo film l'ho già visto.（この映画はもう見たよ）と、目的語に代名詞を添えることによって主語の位置が許される場合であり、目的語および主語を位置変換によって強調する語法である。この強調的語法の起源はかなり古いもので、イタリア語としては最古の文献とみなされている、960年に書かれた「カプアの証文」(Placito capuano)においてすでに確認される (Sao ko *kelle terre* . . . trenta anni *le* possette *parte sancti Benedicti*).

16）≪主体性≫の強調であり、現代語法としては、「目的対象物を主体が摂取する」強調表現として継承されている。例えば mangiarsi, comprarsi, leggersi, fumarsi, beversi そしてその延長線上で個別的に確認されるvedersi等も同質のものといえる。

17）Siの用法と分析は、それまでの研究を踏まえたLepschy (1977, 1981)に集大成されているといえる。ただ、強調的再帰・非人称・受動の明確な機能分化に関しては、トスカーナのnoi si（注14）の介在によって不明隙な部分も残している。

Si vedono *due torri.*（塔が2つ見える）左の例における動詞の複数化（この場合は非人称よりも受動と考えるべきであろう）は、焦点が目的語に強く当てられたためのものであるが、一般大衆のレベルでは、非人称＝3人称単数を貫く姿勢も多く確認される。次に引用する例は、最近の新聞記事（麻薬の売人や常用者が店の前にたむろするのを見かねて、店主が勇気ある貼紙をしたときの文章）からのもので、焦点が複数に当てられているのにもかかわらず、動詞は3人称単数のままである。これは余談であるが、連帯責任という大義名分によって責任の所在が不明瞭なものにされやすい社会と違ってヨーロッパの個人主義が文責署名の形式で反映されているのも興味深い。

Si prega *gli spacciatori e i tossicodipendenti* di non sostare davanti al bar. Franco

次に上げる例は、現代語としての Siの混交体（再帰・非人称・受動）を具現していると思われるものである。

Si accende la luce.

訳 ① 燈りが点る（再帰動詞 accendersi）

② 燈りを点す（非人称Si＋他動詞 accendere）

③ 燈りが点される（受動のSiとして直訳）

結局のところ、文法機能の理論的解説がなくても、「明るくなる」事実に変わりはないということである。この場合のSiの用法は、「海が（は）見える」の≪が≫と≪は≫の主体性の問題は別にしても、日本語の非人称や受動の表現との比較は興味深い結果を生むかもしれない。

18）cf.注（13）

19）cf.注（14）

20）口語のレベルでは、かなり≪重い≫要素として拒否されるが、過去において実行に移されているのも事実である。ここでは、研究者が自分の理論を敷衍させて提示した例は別にして（といっても充足することは確認されている）、社会的なレベルで実行されたものだけを、その接合部分に制限して引用しておくことにする。

mi ve ne, me ve ne, le vi si, gli vi si, se ne la (Decamerone)

mi vi si, gli se ne, mi ce lo, mi ce ne, ci se la (Fucini)

gli ci si, ci se ne (Pratolini)

ci se ne (La Nazione)

vi ci si (Il Messaggero)

21）2人称の敬称（Lei, Voi）と親称（tu）についての通時的な考察と、その地方的な用法を踏まえた敬称度の分析は、Niculescu (1974)に詳しい。3要素が共存する空間においては、その敬称度は Lei＞Voi＞tuであるとされている。

22) Rohlfs (1968), p. 181

23) Niculescu (1974), p. 79

24) Genot (1978), p. 67

25) Rohlfs (1968), p. 182

26) ne +lo (la, li, le) の接合に関しては、大別すると3つの意見に分かれる。

①原則として認めない。②da句の機能に対しては認めてもdi句の機能には認めない。③両方の機能に対して認める。つまり、実例で示すとNe lo trasse (da句)と Ne lo ringrazio (di句)に対する態度である。Hall (1971)は③の寛大な態度を取り、Seuren (1976)や多くの学者は機能分化に基づく②の意見である。興味深いのは Lepschy の場合で、1977年の英語版では①の態度を取っているが、1981年のイタリア語版では②に修正している。ただ、現実的な口語のレベルでは①の態度を示すイタリア人が多く、その要因は、現代語の冠詞前置詞 (nello＜in + lo)の音声に対する≪記憶の強度≫から来ているかも知れない。

27) Battaglia & Pernicone (1950²); *La grammatica italiana* (Loescher)では、強調形(後置形)に「人称代名詞の連続使用を避けるため」の機能を与え、動詞の前後に分割して用いる(その場合、対格・動詞・a +強形)ことを、特に文体的な配慮から示唆している。

RERERENCES

Genot, G.

1978 *Grammatica trasformazionale dell'italiano*, Napoli, Liguori Editore

Hall Jr., R.

1971 *La Struttura dell'italiano*, Roma, Armando

Lepschy, A. L. & Lepschy, G.

1977 *Tha Italian Language Today*, London, Hutchinson

1971 *La lingua italiana*, Milano, Bompiani

Lo Cascio, V.

1970 *Strutture pronominali e verbali italiane*, Bologna, Zanichelli

Niculescu, A.

1974 *Strutture allocutive pronominali reverenziali in italiano*, Firenze, Olschi

Rohlfs, G.

1968 *Grammatica storica della lingua e dei suoi dialetti* (Morfologia), Torino, Einaudi

Santangelo, A. & Vennemann, T.

1976 "Italian Unstressed Pronouns and Universal Syntax", *Italian Linguistics 2*, pp.37-43, Lisse, The Peter De Ridder Press

Seuren, P. A. M.

1976 "Clitic Pronoun Cluster", *ditto*, pp.7-35

Tekavčić, P.

1972 *Grammatica storica dell'italiano*, vol. II, Bologna, Il Mulino